Man is a Thinking Reed.

Reed

KANSAI UNIVERSITY NEWSLETTER

No.68
March, 2022

関西大学ニューズレター
発行日：2022年(令和4年)3月25日
発　行：関西大学 総合企画室広報課
大阪府吹田市山手町3-3-35
〒564-8680／TEL.06-6368-1121
www.kansai-u.ac.jp

2022年に大学昇格100年を迎えます

TERUMO

■対談　三村 孝仁 テルモ株式会社 代表取締役会長 × 芝井 敬司 学校法人関西大学 理事長

医療を止めない。教育を止めない。

◉100年の計。不変の志で、社会的使命を果たす

■研究最前線／Research Front Line
公会計、IR（統合型リゾート）
地方公共団体の公正妥当な会計及び監査の基準の確立を —7
大学院会計研究科 — 清水 涼子 教授

•Establish fair and appropriate accounting and auditing standards for local public entities
Graduate School of Accounting — Professor Ryoko Shimizu

■リーダーズ・ナウ —11
卒業生— お笑い芸人　山里 亮太 さん
料理コラムニスト　山本 ゆりさん
視覚障害者就労相談人材バンク共同代表　岡田 太丞さん
在学生— 社会学部 3年次生　西村 悠里 さん
人間健康学部 2年次生　藤原 ももな さん

■関大ニュース —23
産学・地域連携と連動した人材育成プロジェクトが
JST「次世代研究者挑戦的研究プログラム」に採択 ほか

■対談

医療を止めない。教育を止めない。

三村 孝仁
• テルモ株式会社 代表取締役会長
×
芝井 敬司
• 学校法人関西大学 理事長

◉100年の計。不変の志で、社会的使命を果たす

1921年、体温計の製造販売から始まったテルモ。その翌年、大学へと昇格した関西大学。共に100年の間、片や医療を支える企業、片や高等教育機関として、社会での自らの存在意義を認識し、時代の求めるところに応え、発展の歴史を刻んできた。現在、160以上の国と地域で事業を展開するテルモグループを束ねるのは、関西大学卒業生の三村孝仁会長。芝井敬司理事長が三村会長を訪ね、学生時代の思い出から、コロナ禍での取り組み、グローバル展開の心得まで語り合った。

◆アメリカ放浪。劇的発展の医療機器業界へ

芝井　関西大学の社会学部在学中は、どのような学生生活を過ごされていたのでしょうか。

三村　2年次までの教養課程を終えた頃、専門課程に移る前に、このまま平凡に大学生活を終えていいのかと疑問を持ち、1年間の休学を決意し、アルバイトで資金を貯め、アメリカ西海岸に渡りました。留学など特別な目的があったわけではありません。放浪というのでしょうか、世界を見てみたいという気持ちでした。初めて目にする産業、その数や規模の違いに圧倒された思い出があります。

正直、在学中は勉強熱心な学生ではなかったかもしれません。私の場合、マーケティングも経営学も財務会計も、実学は社会人になってから学んだ部分が大きい。時代の変化とその時々の立場に合わせ、必要なことを見極める力、自分で学び直すことが大切だと感じています。

芝井　テルモに入社された決め手は、何だったのでしょうか。

三村　当時はオイルショック直後で超就職氷河期。業界や業種を選り好みできるような時代ではありませんでした。ただ、その中でも、テルモには他の企業とは違う社会性と、また、医療機器という産業には将来性も感じました。本社が東京のため、親元から自立できるということも大きかったですね。

私が入社した1977年当時のテルモは、まだガラス製の体温計が売上の30％を占めており、これからディスポーザブル医療機器を日本に普及させていこうという時代でした。

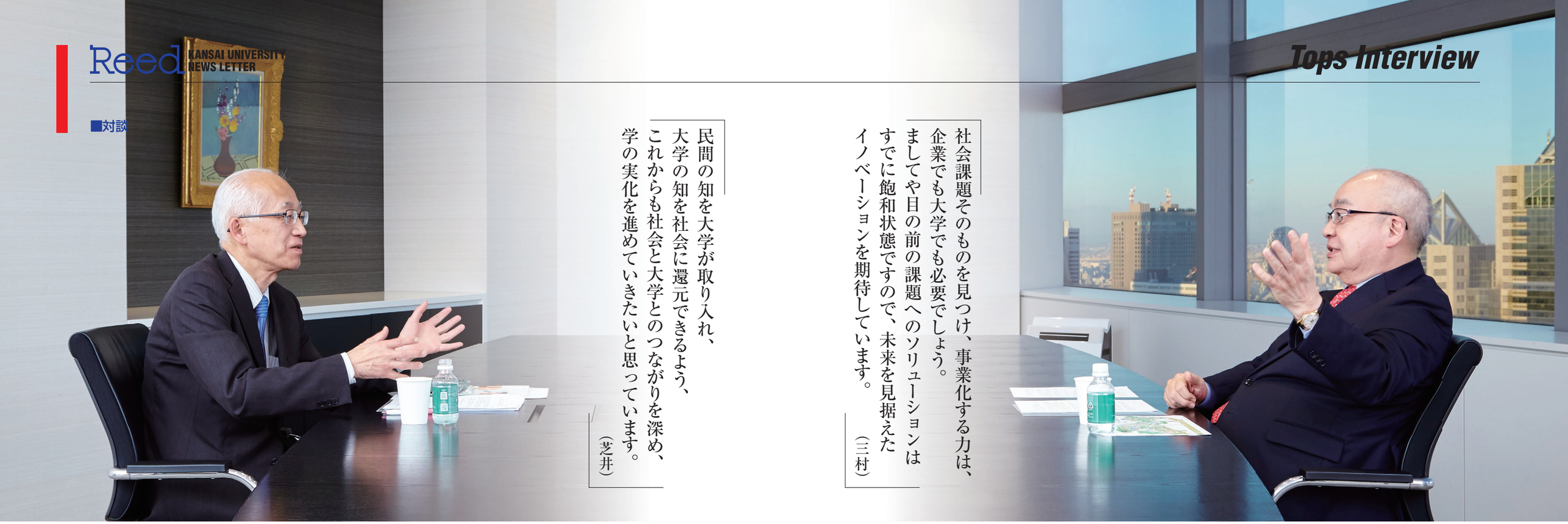
芝井　今では考えられないことですが、私たちの子供の頃は集団予防接種などで注射針、注射器を使い回しすることは当たり前の時代。その後、B型肝炎など感染症の問題が取り沙汰され、一回使い切りの注射器が一般的になりましたね。

三村　医療機器の使い回しによる血液感染の危険性を啓発するのが、当時の私の重要な仕事でした。初めて注射器を全てディスポーザブルに変えていただいた病院は、今でも忘れられません。コストがかかる、といった院内の反対を、感染症担当の医師や看護師が説得して、全面的に導入してくれました。当然こちらはお礼を申し上げましたが、病院側からも感謝の言葉をいただきました。製品を買っていただいた方から感謝されるという仕事は決して多くはないと思います。その時の経験から、医療機器業界はひときわ社会性の高い産業だと実感し、この仕事を続けていく決意も固まりました。

芝井　今や、注射器の中にあらかじめ薬が充填された製品も広く使われていますね。これも御社が大きな役割を果たされたとお聞きしています。

三村　私はまさに薬剤充填済みの注射器、プレフィルドシリンジを事業化する責任者でした。当時一部の国で導入が進み始めていた欧州での視察、市場調査を経て、将来の日本社会に必要な医療機器だと確信しましたが、社内では反対の声もありました。

当時の日本では、ディスポーザブルシリンジが毎年売上を伸ばし、弊社製品のシェアが非常に高かった。プレフィルドシリンジを事業化すれば、必然とディスポーザブルシリンジのシェアが減る。自社の売上を相殺してしまうような製品に、あえて巨額の投資をする意味があるのか。それでも私は、ディスポーザブル医療機器の成長カーブがピークに達する時がじきに来る、競合他社も市場に参入し、このままの競争力は維持できないだろう。会社が成長し続けるためには、未来を見据え、より安全で便利な製品へとシフトし、付加価値を高めていくべきだと当時の経営陣に粘り強く説明し、何とか納得してもらえました。



民間の知を大学が取り入れ、
大学の知を社会に還元できるよう、
これからも社会と大学とのつながりを深め、
学の実化を進めていきたいと思っています。
（芝井）

社会課題そのものを見つけ、事業化する力は、
企業でも大学でも必要でしょう。
ましてや目の前の課題へのソリューションは
すでに飽和状態ですので、未来を見据えた
イノベーションを期待しています。
（三村）

◆時代を超え、引き継がれるテルモのDNA

芝井　コロナ禍においては、世界の医療を支える企業として、どのように対応されてきたのでしょう。政府や関係省庁、医療現場から難しい要請もあったのではないでしょうか。

三村　中国・武漢で流行の兆しがあった時、すぐに医療機器の寄贈などにより中国を支援し、現地社員を中心に対応にあたりました。そして横浜に停泊中だったダイヤモンド・プリンセス号への支援、ワクチンを無駄なく投与できる注射器や体外式膜型人工肺「ECMO」の増産など、「医療を止めない」を合言葉に、全世界のアソシエイト（社員）が一丸となり、高い志と倫理観を持って対応してきました。

テルモには、設立に深く関与した北里柴三郎博士をはじめ創業者たちの志を引き継ぎ、感染対策に尽力してきた長い歴史があります。外務省はじめ世界中の政府機関から要請がありました。このコロナ危機では、医療は重要な国家安全保障の一つだと再認識されたこと、そして最前線で立ち向かう医療現場での課題解決に取り組み続けることで、改めてテルモの社会的使命、存在意義を実感する機会となりました。

例えば国内では、マスクが不足している医療機関に、弊社工場で確保していた工業用の防塵マスクを寄付したこともありましたが、これはトップダウンでの指示ではなく、社員が迅速に判断して実行したものです。今、この瞬間、患者さんが苦しんでいる、医療の現場が困っていると知れば、アソシエイトが自発的に考え動く。それはやはり長年培ってきた、テルモのDNAなのだと思います。

芝井　コロナ対応に関しては、関西大学はコロナウイルスの流行を早々に危機事象と位置付け、2020年1月28日に危機対策本部を設置しました。おそらく全国の大学で第1号だったと思います。当時、私は学長職でしたが、その時の理事長に、「空振りになるかもしれませんが、対策本部を置きましょう」と相談し、すぐさま立ち上げました。「さすがにパンデミックにはならないだろう」。当時は多くの人がその程度の認識だったと思います。それでも最悪の事態に備え、最低限の準備はしなければと考えていましたが、現実は想定をはるかに超えたものになってしまいました。

◀2021年「第5回日本医療研究開発大賞内閣総理大臣賞」を受賞した体外式膜型人工肺「ECMO」

対策本部会議では、法人・教学の長が協力し状況の変化に逐次対応しながら、社会安全学部の教員を務める感染症の専門家を交え、感染予防対策をはじめ正課授業・課外活動の取扱い等、迅速に決定を重ねてきました。学生たちの学びを止めない、教育研究環境を維持するため、心休まることのない2年間でした。

◆大学昇格100年。「学の実化」を掲げ1世紀

芝井　昨年、テルモは創立100年をお迎えになったそうですね。関西大学も今年で、大学に昇格して100年を迎えます。1886年、大阪西区京町堀に関西法律学校として開校し、大学令公布を受けて旧制の大学へと昇格したのが1922年。日本の私立大学では14番目で、同じ時期に昇格した大学に、立命館大学や立教大学があります。

千里山キャンパスは、その際に購入されたもので、郊外だった吹田千里山の土地に広大な用地を確保し、法学部と商学部の2学部で申請しました。大学昇格にあたっては、当時で60万円の基本財産を作り、国庫に寄託をしなければなりませんでしたが、大阪財界から多数の寄付をいただきました。そして、大阪商業会議所の会頭を務めた山岡順太郎が、総理事兼学長に就任して新生関西大学をリードしていきます。山岡は、大学で教えることは空理空論になってはだめだ、学術的な理論研究と、現実の世界との間をうまく橋渡しをして、学理と実際との調和をはかっていかなければいけないということを盛んに説き、それを「学の実化（がくじつげ）」という言葉で表現しました。爾来、「学の実化」は関西大学の学是として現在まで受け継がれています。

一昔前の高等教育は、大学の中だけで教育研究が完結していましたが、現在では企業をはじめ社会と連携しながら、教育活動や研究活動をすることが、大学の教育研究活動の望ましい在り方になっています。御社とも、素材開発分野などで共同研究をさせていただいています。民間の知を大学が取り入れ、大学の知を社会に還元できるよう、これからも社会と大学とのつながりを深め、学の実化を進めていきたいと思っています。

三村　たしかに学問や研究は、社会実装できるかどうかが大切ですね。企業視点からすれば、社会実装につながらない研究は、ただの自己満足になってしまいます。社会課題そのものを見つけ、事業化する力は、企業でも大学でも必要でしょう。ましてや目の前の課題へのソリューションはすでに飽和状態ですので、未来を見据えたイノベーションを期待しています。

◆実は充実。関西大学の医療関連研究

芝井　関西大学には、関大メディカルポリマー「KUMP」という医療用高分子材料と医療機器の研究開発プロジェクトがあります。これは、2016年度の文部科学省「私立大学研究ブランディング事業」に採択された取り組みで、5年間の助成期間終了後、昨年度からは「関大メディカルポリマー研究センター」として活動を継続しています。

この研究プロジェクトは、長年にわたる大阪医科薬科大学との共同研究を踏まえた実践的研究に基づいて、最終的な社会実装を目標にして長期スパンで考えています。関大のブランディングにつながる有望な研究プロジェクトと位置付けています。

KUMP
KANSAI UNIV. MEDICAL POLYMER

医療用の高分子材料
関大メディカルポリマー「KUMP」▶

■対談

芝井 敬司──しばい けいじ
■1956年大阪府大阪市生まれ。1978年京都大学文学部史学科（西洋史）卒業。1981年京都大学大学院文学研究科博士課程後期課程中途退学。1984年より関西大学に着任し、1994年文学部教授、2002年文学部長、2006年副学長を歴任し、2016年学長。2020年10月に学校法人関西大学理事長に就任。一般社団法人日本私立大学連盟常務理事。公益財団法人大学基準協会理事。文部科学省大学設置・学校法人審議会特別委員。一般社団法人大学スポーツ協会理事。独立行政法人大学入試センター運営審議会委員。

三村　それは非常に興味がありますね。弊社の製品は高分子材料を使ったものが本当に多いですから。

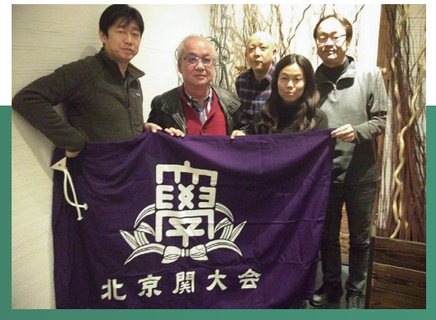
芝井　関西大学には医療系学部はありませんが、工学を中心とした研究と医療現場は実は近く、チタン合金を生体材料として設計し、骨粗鬆症の治療に応用するという研究もしてきました。最近では薬剤デリバリーシステム、人工血液など、工学的な視点から医療分野への貢献を探求する研究者の層がかなり分厚くなっています。特に医療用高分子材料の研究では、本学も他大学に負けていないと思っています。

◆グローバル展開で大切にすべきマインドセット

芝井　今や御社の売上は7割が海外事業ですね。海外でビジネスを展開するには、大変なご苦労があったのではないでしょうか。

三村　急激にグローバル化が進展しているとはいえ、ほんの20年前くらいまでは、テルモはまだドメスティックな会社でした。2000年前後から積極的に海外M&Aを仕掛け、この20年での変貌は凄まじいものです。グループが世界中で事業拡大を続ける現在のような形態になりますと、日本発で考えるのではなく、最初からグローバルに発想するマインドセットを基本にすることが大切です。

テルモ中国の年度総会での集合写真



中国赴任中に立ち上げた関西大学校友会の海外支部「北京関大会」

テルモとのJV（合弁事業）で腹膜透析事業を進める中国最大の医療機器メーカーの一つ「威高集団」の陳学利会長（右）と。この提携は三村会長が中心となって始められた

視察旅行で訪れた敦煌・莫高窟

芝井　三村会長は長く中国に赴任され、現地でのテルモのビジネスを大きく拡大されました。中国では価値観の違いなどを感じられませんでしたか。

三村　中国には2009年から2016年まで駐在しました。この間、関西大学校友会の海外支部「北京関大会」も立ち上げました。

　中国人は、見た目は日本人と似ていても、価値観や考え方はむしろアメリカ人に近いと思います。日本企業は、自社の技術や製品が優れていれば受け入れられると考えがちですが、海外展開で重要なのは「その国の人たちにとってベネフィットがあるかどうか」の思考が第一。現地の立場に立って考えなければ、絶対に成功できません。中国の人たちと話し、中国を理解し、中国を好きになること。私はまず徹底してそこから始めました。世界中どの国で仕事をする際であっても共通ではないでしょうか。異文化におけるビジネスでも、人とのつながりは大切なものです。

◆未来像を共有し、バックキャストで実行

芝井　御社の次の100年の成長を語る上で、三村会長が「ありたい未来像からのバックキャストで考えること」を強調されているのを拝見し、「なるほど」と大変共感しました。

三村　振り返ってみると、過去に成功した事業は、間違いなくこの思考で取り組んでいました。未来像を鮮明に描き、そこに至るため、5年後、3年後、そして今何をすべきか徹底的に構想し、逸れた場合は修正を加える。今を起点に積み上げる「フォーキャスト」ではなく、「バックキャスト」の思考で、何事にも意図を持って取り組まなければ、複雑性を増す時代、ありたい未来像を実現することは難しいと感じています。

芝井　その際、全世界のアソシエイトといかに理念、ビジョンを共有するかが重要だと思われますが、どのような工夫をされているのでしょうか。

三村　テルモグループのグローバル化に伴って、買収によって異なる企業文化を持つ海外企業がグループに加わったり、新しく入ってくるアソシエイトの多様化も進みました。そこで、世界中のアソシエイトをつなぐ共通のものが必要だと考え、グループ共通の価値観である「コアバリューズ」を2019年に策定しました。世界各地のグループ会社と対話の上で、最初から英語で作成、それから日本語も含めた各言語に展開し、テルモグループ全体で大切に掲げているものです。また、私が経営者としてメッセージを発信する際は、26,000人の心に刺さっているかという意識を常に持つようにしています。会社がいかに世界に広がって、規模が大きくなっても、テルモが大切にする価値観に共感する集団であり続けられるよう努めています。

◆大学には個性を。学生には自ら課題を見つける力を

芝井　卒業生として関西大学に期待すること、学生たちへのメッセージをぜひお聞かせください。

三村　日本の教育は今後ますます変化していくと思いますが、総合大学でありながら、関西大学にしかないカラー、尖ったブランドアイデンティティを持つ大学であり続けてほしいですね。

　誰かに問題を与えられ、正解を考えるという時代ではもはやありません。学生たちは、何事にでも好奇心を持ち、自分で課題を見つける発想力、そして解決までのストーリーを作る力をぜひ養ってください。学びは永遠に続きます。大学入学はゴールではなくスタートです。存分に学び、楽しみ、そして個性を大切に、伸び伸びと社会で活躍してほしいと思います。

三村 孝仁──みむら たかよし
■テルモ株式会社代表取締役会長。1953年大阪府堺市生まれ。1977年関西大学社会学部卒業。同年4月テルモ株式会社入社。2007年取締役常務執行役員。2010年4月中国総代表。同年6月取締役専務執行役員。2017年より現職。公益財団法人テルモ生命科学振興財団理事長。一般社団法人日本医療機器産業連合会会長。公益財団法人日中医学協会評議員。日本医療機器テクノロジー協会副会長。一般社団法人日本取締役協会幹事。2022年度関西大学客員教授に就任。

●テルモ株式会社 TERUMO
東京都渋谷区幡ヶ谷に本社を置く、大手医療機器メーカー。1921年創業。第一次世界大戦により輸入が途絶えた体温計の国産製造を目指して設立。「医療を通じて社会に貢献する」という理念のもと、2022年3月現在、心臓血管、ホスピタル、血液・細胞テクノロジーの各事業において幅広い製品・サービスを世界160カ国以上で提供。

公会計、IR（統合型リゾート）・Public Accounting and Integrated Resorts (IR)

地方公共団体の公正妥当な会計及び監査の基準の確立を

学生も住民の一員、公会計に関心を持とう

Establish fair and appropriate accounting and auditing standards for local public entities

Students are also members of the community; have an interest in public accounting

◉大学院会計研究科　清水 涼子 教授

• Graduate School of Accounting
——Professor *Ryoko Shimizu*

医療や年金など公共サービスに関してニュースで耳にしない日はない。サービスの担い手である地方公共団体は、2020年から改正地方自治法により、内部統制体制の整備が義務づけられ民間企業並みのガバナンスが導入されたばかり。しかし、国や地方の行財政運営は果たして本当に住民目線に立っているのか。制度の形骸化を防ぐには何が必要か。

清水涼子教授は米国並みに確立した会計及び監査の基準と独立した監査組織の必要性を強調し「学生の皆さんも住民の一員として関心を持って公会計に触れよう」と呼び掛けている。

We hear about public services like health care and pensions in the news every day. In 2020, the revised Local Autonomy Act made it obligatory for local public entities that provide public services to establish internal control systems and introduce governance similar to that of private companies. However, do the central and local governments really take residents' views into account in their administrative and fiscal management? What is needed to prevent the system from losing substance?

Professor Ryoko Shimizu stressed the need for an independent auditing organization and standards for accounting and auditing that are as established as those in the United States, and encouraged students to be familiar with public accounting as members of the community.

■州単位の独立監査組織が強力な権限をもつ米国

——「地方自治体の監査と内部統制―2020年改正制度の意義と米英との比較」（同文舘出版）を2019年9月に出版されましたね。

日本で上場会社に内部統制評価制度が導入されて以降、民間企業のガバナンス整備は加速しているのに、地方公共団体の取り組みは十分とは言えません。

そこで2016年から1年間、先進する米国で地方公共団体の会計や監査の実務がどう運営されているか、実際の現場を見て回りました。

「地方自治体の監査と内部統制―2020年改正制度の意義と米英との比較」（同文舘出版 2019年）

米国では州ごとに大きな権限を持つ監査組織があり、行政から独立し職員採用も別枠。組織の人員も100人以上と充実し、給与体系や待遇などの保障も整備されています。格付機関が地方公共団体の財政の健全性について信用格付けをし、そのランクにより資金調達コストが変わります。一方、日本は政府保証があるため一律。そこがまず違います。米国では企業会計手法を導入した開示に積極的でないとランクが下がり、有利な資金調達ができない仕組みがあり、率直に「素晴らしい」と思いました。

2016年まで委員を務めた第31次地方制度調査会（地制調）の答申作成の経緯やこの研究から得られた米国の公的部門におけるガバナンスに係る知見から、両者の監査制度等の違いを比較しまとめました。

■「住民より行政組織が大事」になりかねない監査の仕組み

——日本と米国とは大きな違いがありますか。

私が2011年から4年間務めた大阪府監査委員は全部で5人。うち1人は議員選出で毎年代わり、あとは公認会計士や弁護士、民間会社出身者です。日本の監査委員は常勤が少なく大阪府でさえ1人。大所帯の米国と大きな違いがあります。

監査委員を支える組織である監査委員事務局もありますが、事務局職員は一般職公務員で、その約7割が3年も経たないうちに監査の知識も十分マスターしないまま異動します。庁内の人事異動の権限は実質的なところ役所の中枢が握っています。そのため、首長の姿勢が大きく事務局にも影響し、改革に熱心な首長の下では職員も従いますが、そうでない人に代わると途端に事務局長以下も守旧派に交代しトーンダウン。そういった状況は、住民目線に立って粛々と監査をすべき監査委員にとっては本当に問題ですね。

——住民の目からみても監査委員事務局は本当に公平なのか、と疑わしく映りますね。

現状は、住民の視点より「組織内のため」の監査になりかねない危険性をはらんでいる仕組みです。

2017年の法律改正により内部統制体制の整備は都道府県や政令指定都市等の首長の義務となり、他の市町村は努力義務となり

■State-based independent auditing organizations have strong authority in the United Stated

—— You published *Auditing and Internal Control in Local Governments: The Significance of the 2020 Revised System and Its Comparison with the United States and the United Kingdom* (Dobunkan) in September 2019.

Since the internal control evaluation system for listed companies was introduced in Japan, the governance of private companies has accelerated, but the efforts of local public entities have been far from sufficient.

So, for one year from 2016, I visited sites to see how the accounting and auditing practices of local public entities are conducted in the United States that stays ahead of Japan.

In the United States, each state has its own audit organization which has strong authority, is independent of the government, and employs their own staff. The number of personnel in such an organization is over 100, and the compensation system and treatment are guaranteed. A rating agency assigns a credit rating to the fiscal soundness of local public entities, and funding costs vary according to the rating. On the other hand, since Japan has a government guarantee, it is uniform. That's the difference. In the United States, if you are not proactive in disclosing information using corporate accounting methods, you will be downgraded and not be able to raise funds in an advantageous fashion. I frankly thought this was wonderful.

Based on the background of the preparation of the report of the 31st Local Government System Research Council for which I served as a committee member until 2016, and the findings on the governance in the U.S. public sector obtained from this study, I compared and summarized the differences between the two auditing systems.

■Audit system that could make administrative organizations more important than residents

—— Is there a big difference between Japan and the United States?

I served on the Osaka Prefectural Audit Committee for four years starting in 2011. There are five members in total. One of them is an assembly member and elected every year, and the others are CPAs, lawyers, and people from the private sector. There are few full-time auditors in Japan, and even in Osaka, there is only one. This is a big difference from the United States.

There is also the Audit Committee Secretariat, which supports the Audit Committee members, but the Secretariat staff are regular civil servants, and about 70% of them transfer within three years without fully mastering the knowledge needed to perform audits. The authority for personnel transfers within the Osaka Prefectural Office is, in practical terms, held by the center of the organization. Therefore, the chief's attitude greatly affects the Secretariat, and the staff follow the chief who is enthusiastic about reform, but as soon as he is replaced, the secretary-general and others are replaced as well by the old school and tone down. Such a situation is a real problem for the Audit Committee members, who should conduct audits from the viewpoint of residents.

—— Residents may wonder if the Audit Committee Secretariat is really fair.

The current system is fraught with the danger of audits being for the sake of the organization rather than from the viewpoint of residents.

Due to the revision of the law in 2017, it became the duty of the chiefs of prefectures and ordinance-designated cities to develop internal control systems, and other municipalities are obliged to make the best efforts. It is true that some small cities, towns, and villages have no staff and no CPAs. But auditing is absolutely necessary. In Japan, the examination of financial results often ends with an actual cash flow check and does not include confirmation of assets and liabilities.

◀清水教授の演習風景
Seminar by Professor Shimizu

ました。確かに小さな市町村は人手もなく公認会計士ゼロの所もあります。でも監査は絶対に必要です。日本だと決算審査で現金が実際どれだけ動いたか「入と出」のチェックで終わることが多く、資産や負債などの確認は含まれないのが現状です。

米国では基本的に州の監査組織が州内の大小の町まで全て管轄し、様々な視点から詳しく監査します。訪問先のマサチューセッツ州では独立した監査組織が機能していました。また、精緻な会計基準に準拠した財務諸表は隠れ債務などもあぶり出し、ボストン市ではその格付けへの影響が話題になっていました。日本ではいまだ確立した会計基準すらありませんが、国際標準の会計及び監査の基準が必要です。

■カジノ含むIRの会計ガバナンスの課題を洗い出したい

――カジノを中心にしたIR(統合型リゾート)のガバナンスも研究されていますね。

ワシントン州に先住民のカジノがあり、米国滞在中に知り合った研究者に「カジノの会計上の問題に興味がある。日本にできるカジノを一緒に研究しよう」と誘われたのがきっかけです。文部科学省の科学研究費プロジェクトに採択され、2020年4月から研究を始めました。ゲーミング(賭博)は現金取引が多くガバナンスも複雑で、現在、ようやく国内の類似業種、パチンコや競馬の問題点の整理ができたところです。今年8月に渡米の計画があり、大阪でIRの実現を目指しているMGMリゾーツ・インターナショナル社(米国)にネバダ州現地調査への協力をお願いしています。

咲洲庁舎から夢洲を望む▶
(2019年1月撮影)

◀大阪IRのイメージ写真
(※RFP提案時点でのイメージであり、今後変更となる可能性があります)
Copyright © 2021 MGM Resorts International and ORIX Corporation. All rights reserved.

MGMリゾーツが運営する
ラスベガスのベラージオホテル▶

米国の企業はしっかりした収益基盤と独立したガバナンス体制を備えており、また規制当局も監視しています。日本では、事業者の収益性が確保されるのかどうか分かりません。また、国内にはすでにゲーミング関連事業が相当なマーケット規模を有しているのに、IRだけを別枠で考えるのはすごく奇異に感じます。縦割行政の現われでしょう。経済振興という究極的な目的のために、ゲーミング関連事業を育成していこうという気構えがあまり感じられません。国と地方公共団体との言い分を押しつけて「果たしてうまくいくのかしら」と思います。日本のIRはちょうど官と民の接点ともいえる位置付けにあり、事業を成功に導くためのガバナンスの課題を洗い出したいと思っています。

■公会計には理論を学びながら実践できる奥深さがある

――会計学を研究されるようになったきっかけを教えてください。

私は大学で会計ではなく法律を勉強し外資系銀行に総合職として就職しました。会計学を勉強するきっかけは、その在職中に証券アナリスト試験の科目として財務会計に出会ってからです。飯野利夫先生の「財務会計論」が非常に理論的で初めての私にも会計がよく理解できました。銀行退職と同時に公認会計士の受験勉強を始め、1988年の試験で合格しました。監査法人に18年在籍し、前半は企業会計、後半は公会計に専念しました。

2000年ごろから行政にも民間経営手法を導入し公共サービスの質を向上させるニューパブリックマネジメント(NPM)という考えが広がり、この理論を実践できる住民目線の公会計に興味を持つようになりました。

――公会計を学生にどのように教えていますか。

学生にはとても難しいようですが、身近な地方公共団体に興味を持ってほしいことから「住んでいる市や町がバランスシートを公表しているはずだからホームページで調べてごらん」と呼び掛けています。どのような財政状態なのか財務諸表を見れば分かるので、「自分の住んでいる所のことは絶対知らなきゃいけないよ」と言っています。関心を持ちにくい理由の一つには公会計が公認会計士試験科目に含まれていないことです。米国のように一般に公正妥当と認知された会計及び監査の基準がないと。政府が公会計や監査の重要性、必要性を十分認識していないのも大きいと思いますね。

会計、監査は民間だけのものではなく、広がりがあります。公会計には、民間にはない、公平性や公正性を考慮する必要がある。まだまだ未整備な部分があり、実務と並行して研究し、いい方向に変えていける。公会計は学問的に奥深く面白い世界だと思います。

――学生の皆さんに望むことやメッセージをお願いします。

数字で明確に示せる会計学は、物ごとを理解するのに一番手っ取り早い方法です。企業や行政が何をしているか、財務諸表を見ればすぐに分かります。

公会計については、公共サービスを無意識に享受するのではなく、どんな仕組みで提供され、改善していくのに会計や監査をどう活用すればよいのかを考えてほしい。若い世代こそがこれからの担い手ですから。

In the United States, the state audit organization basically oversees all the towns in the state, large and small, and performs detailed audits from various viewpoints. The state of Massachusetts, which I visited, had an independent audit organization. Financial statements that conform to sophisticated accounting standards expose hidden liabilities, and its impact on Boston's credit rating was the talk of the town. Although there are no established accounting standards in Japan, global-level accounting and auditing standards are necessary.

■I want to identify issues concerning the accounting governance of IR, including casinos

―― You are studying the governance of integrated resorts (IR), which are centered on casinos.

There is a casino operated by Native Americans in Washington state, a researcher I met while I was in the United States said, "I'm interested in accounting issues of casinos. Let's study casinos in Japan together." This research was selected as a science funding project by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, and we started the research and study in April 2020. Gambling involves many cash transactions and complicated governance. At present, we have finally sorted out the issues of similar industries in Japan, such as pachinko and horse racing. I am planning to visit the United States in August this year and asking MGM Resorts International (U.S.), which is aiming to establish IR in Osaka, to cooperate in the field study in Nevada.

U.S. companies have a solid revenue base, independent governance, and are monitored by regulatory agencies. In Japan, I am not sure if the profitability of the business operators can be secured. Also, it seems strange to think of IR as a separate category when gambling businesses already have a large market in Japan. It is a manifestation of the vertically divided public administration. I don't see the attitude of trying to develop gambling businesses for the ultimate purpose of economic development. I wonder if they will succeed while the government and local public entities impose their opinions on business operators. IR in Japan is positioned as a point of contact between the public and private sectors, and I would like to identify governance issues that will guide this business to success.

■Public accounting has the depth to enable us to practice it while learning theory

―― How did you come to study accounting?

I studied law, not accounting, in college and took a general management position at a foreign bank. I started studying accounting when I came across financial accounting as a subject in the securities analyst exam while in office. Professor Toshio Iino's *Financial Accounting Theory* was very theoretical, so a beginner like me was able to understand accounting well. When I left the bank, I started studying for the CPA exam and passed it in 1988. I worked at an auditing firm for 18 years, concentrating on corporate accounting in the first half and public accounting in the second half.
Around 2000, the idea of New Public Management (NPM) spread, which improves the quality of public services by introducing private management methods into the public administration. I became interested in public accounting, which uses the viewpoint of residents and is able to put this theory into practice.

―― How do you teach students about public accounting?

It can be difficult for students, but I want them to be interested in the local public entities around them. So, I ask them to look up

the balance sheet on the homepage of the city or town where they live. I tell them, If you look at the financial statements, you can see what kind of financial condition your city or town is in. "You need to be familiar with it." One of the reasons why it is difficult for people to get interested is that public accounting is not included in the CPA exam. We should have generally accepted accounting and auditing standards as in the United States. I think it is also important that the government does not fully recognize the importance and necessity of public accounting and auditing.

Accounting and auditing are not limited to the private sector. Public accounting needs to take into account equitability and fairness, which the private sector does not have. There are still some parts that remain undeveloped, so we can study it in parallel with practical work and change it for the better. I think public accounting is a deep and interesting world academically.

―― Can you give a message to students?

Accounting is the quickest way to understand things, as it can be clearly described with numbers. If you look at financial statements, you can see what companies and governments are doing.

With regard to public accounting, instead of subconsciously enjoying public services, I want everyone to consider how accounting and auditing can be used to provide and improve public services. The younger generation are the leaders of the future.

LEADERS NOW!

■リーダーズ・ナウ［卒業生インタビュー］

天才たちの中で“凡人”を成立させる!

圧倒的な努力で言葉の引き出しを増やす

◉お笑い芸人
山里 亮太 さん ―文学部教育学科2001年卒業―

トレードマークの赤い眼鏡でにこやかに現われたのは、お笑いコンビ「南海キャンディーズ」の“山ちゃん”こと山里亮太さん。鋭いツッコミと独創的な言葉選びを武器に、テレビを中心にラジオ、ナレーター、イベントなど幅広い分野で活躍し、今やその声を聞かない日はないほどだ。「関西大学に入学してなかったら今の僕はない」と母校愛の溢れる山里さんに、オリジナリティ満載の努力法などについて語っていただいた。

山里 亮太――やまさと りょうた
■1977年千葉県生まれ。千葉経済大学附属高等学校、関西大学文学部教育学科卒業。3年次生から吉本総合芸能学院(NSC)に通い、2003年に“しずちゃん”こと山崎静代さんとお笑いコンビ「南海キャンディーズ」を結成。04年の「ABCお笑いグランプリ」優秀新人賞をはじめ、多くの賞を獲得。18年にコンビ初の単独ライブ「他力本願」を開催。タレント、司会者、声優、ナレーター等としてテレビ、ラジオをはじめ、多数のレギュラー番組を抱える。著書に『山里亮太短編妄想小説集「あのコの夢を見たんです。」』(東京ニュース通信社)、『天才はあきらめた』(朝日新聞出版)他。

◉最高に楽しかった大学生活

――山里さんは千葉県のご出身ですね。芸人を志して関西の大学を受験されたそうですが、関西の印象はいかがでしたか。

大阪に到着した時、周りは大阪弁でまくし立ててしゃべる人ばかりで、「やっぱりここに来たのは間違いだったかな」って思いました(笑)。これからお笑いの聖地で戦うんだと思うと怖かったのですが、阪急電車を降りて関西大学の正門に着いて、キャンパスを見た瞬間、「これが夢見てた大学だ！」と、不安が一気に消えました。学生寮に入ることを希望していたので、その面接を受けるため、正門を通って、図書館前を歩いて、きれいな芝生のグラウンド横を通って、面接会場に着くまでずっとワクワクしっぱなしでした。

――関西大学での4年間は有意義でしたか。

最高でしたね、本当に。めちゃくちゃ楽しかった。関大に入って北斗寮(現ドミトリー月が丘)で生活していなかったら、今の「お笑い芸人の山里」、「南海キャンディーズの山里」という存在はなかったと思います。正しい言い方なのか分かりませんが、人生のすべてをそこで遊びましたから(笑)。人生における最高の夏休みだった。それでいて、文学部の勉強も楽しかったし、ベタですけど良い仲間にも会えました。関大には多種多様な人が集まっていて、普通に生活していたら増えないであろう引き出しがめちゃくちゃ増えましたよ。

当時、北斗寮って男子寮でしたからね。僕、人見知りなんですけど、入学式より先に寮のオリエンテーションがあって、そこで同期との友情が芽生えました。先輩たちのバンカラな歓迎が怖くて追い込まれてね(笑)。その経験もあるから、大学で友達をたくさん作りたいなら、入学後すぐが頑張るポイント。そのタイミングでパワーを注げば、後の4年間を楽しく過ごせますから。

僕なんか大学生活が楽しすぎちゃって「お笑いを目指すの、もういっか」という時期もあったんですよ。関大の事務職員の方ともすごく仲良かったから、もう関大の職員になろうかなと。でも、寮の先輩が勝手にNSCの願書を持ってきて、「おまえ、みんな応援してるんだから、今すぐ書け！」って(笑)。お笑い芸人を目指す人をリスペクトしてくれる人が多かったんですよ。ゼミの山下栄一先生も僕が芸人になることを応援してくれました。心理学を学んでいるのに、課題のレポートも「山里君の好きなお笑いを絡めて書いていいよ」と。夢に理解があって、優しく寛容でした。

だから、関大にはすごく恩を感じています。それで、いつ学園祭に呼んでくれるのかなと、スタンバってるんですけど(笑)。

◉緊張できる場があるのはラッキーなこと

――本当は人見知りとのことですが、出番前など、緊張されることは今もあるのでしょうか。

します！ めちゃくちゃしますよ！ でも、緊張なんて標準装備だし、するのが当たり前。タモリさんがよくおっしゃっていることの中に、僕のすごく好きな言葉があるんです。「緊張できる場というのは、最前線で自分の好きなことに挑んでいる人にしか用意されないんだよ」って。タモリさんは「緊張する人が羨ましい。準備し続けた上で緊張してその場に立てるのはめちゃくちゃラッキーな事だ」って。年を重ねるとだんだん許されるようになって、緊張する場面が減りますからね。

緊張するのは、自分がその場やその人を大切に思っているからこそ。緊張すればするほど「こんなにここが好きなんだ、この人と仕事がしたいんだ、この人に良いところを見せたいんだ」ということだと思います。その緊張が心地良く思える状態まで至るには、尋常じゃない準備と努力をするしかない。……という僕もなかなかできないですけどね。さっきなんばグランド花月(NGK)の出番で、ガチガチに緊張してすべっちゃったし(笑)

――ちょうど今、トークライブ「山里亮太の140」の10周年記念で全国を巡ってらっしゃいますね。日々違う土地の舞台に立つことはいかがでしょうか。

日本全国どこへ行っても楽しいですが、初めての土地は緊張しますね。自分の地元のこと知ってくれたり、好きって言ってくれたりするとうれしいじゃないですか。明日、初めて宮崎に行くので、事前にどんな土地柄なのか調べたり、宮崎出身の芸人に情報をもらったり……これはあんまり役に立たなかったな(笑)。僕、古舘伊知郎さんにあこがれていて、以前「トーキングブルース」というライブを高知まで観に行ったんです。古舘さんがマイクを持って、高知のあるある話やご当地グルメ、名所、名産などを実況しながらステージに上がって行くんですよ。それがどっかんどっかんウケてて、本当に格好いいなぁと。明日、自分も実践してみようと思っていますけど……この後、一生懸命考えなきゃ(笑)

▲大学の男子寮・北斗寮の玄関前で仲間の寮生たちと

北斗寮・室内での記念撮影▶

■リーダーズ・ナウ［卒業生インタビュー］

LEADERS NOW!

▲舞台に立つ山里さん。向かって右は「南海キャンディーズ」で相方をつとめる“しずちゃん”こと山崎静代さん（写真提供：吉本興業）

――まさに緊張を取り払うための準備と努力ですね。ご自宅には資料も大量にあると伺いました。

大学ノートですね。2000年から毎日、20年以上書き続けているから、恐らく300冊くらいあります。内容は自分の好きな言葉やその日の出来事、妄想なんかも……。例えばタレント名鑑をバーッと開いて出てきた人とどんなデートをするか。この前ノートを見返したら、僕、ガッキーと天保山でデートしてた（笑）。ガッキーがジンベイザメ恐れちゃってね。「大丈夫だよ、コイツ優しいんだよ」って。だから、ガッキーが結婚した時は勝手に失恋した気分になりました（笑）。そんなことを書いていたら、なんと「その妄想、本にしませんか？」とお話をいただいて。ドラマ化もされましたからね。

このノートが、意外とお守りみたいになっているんですよ。明石家さんまさんの番組に呼ばれた時なんて、震えるくらい緊張したけど、「でも僕、これだけやってきているし、これだけエピソード持ってるし、さんまさんと目が合っても5回までなら大丈夫な弾、持ってるし！」って。

◀『山里亮太短編妄想小説集「あのコの夢を見たんです。」』（東京ニュース通信社 2019年）
16人の女優・アイドルをモデルに綴った初の短編小説集。帯の推薦文は大学の同級生で、交流のある作家・西加奈子氏によるもの

◉「めちゃくちゃ凡人」の自分を成立させるために

――山里さんの自虐を交えたトークは、場の雰囲気を温かくする感じがします。いつもどんな思いを持っていらっしゃるのでしょう。

関わってくれる人に対するリスペクトでしょうか。僕らの職業は、観てくれるお客さんの笑い声がないと成立しない。笑ってもらってご機嫌になってご飯が食べられる。そんな夢のような仕事をしていて、その恩があるのに、人を不快な気分にさせたら、恩を仇で返すことになるじゃないですか。「僕を登場させてくれてありがとうございます。その代わり、あなたが僕に関わった事を良かったと思ってくれるよう努力します」という感謝の気持ちがありますね。ただ傷つけてしまっただけで終わった場合は大いに反省します。それだとお笑い芸人ではないと思っているので。

それに、僕は運が良いから芸能界で生きていると、心の底から思っているんですよ。それなのに人に厳しく当たるって「おまえ、超ラッキーなくせに、運も独り占めすんの？」って。振り返ると、当時は僕が耳を傾けなかっただけで「一人じゃ何もできない」とか、大事なことは全部、関大時代に先輩たちから教わっていたんですよね。年を重ねて、やっとそれが分かってきた気がします。

――言葉選びのセンスやトークの瞬発力にも驚かされます。どのように技術を磨かれたのですか。

芸人の世界って、とんでもない化け物ばっかりなんですよ。そんな中に入って、気付くことができて良かったのが、「めちゃくちゃ凡人だな」ってこと。天才たちの中にいる「ものすごく凡人の自分」を成立させるためにはどうしたらいいんだろう？ それにはやっぱり、納得するくらいの努力をするしかない。少しでも追いつくために努力の仕方も考えて、普段、人と話す時や本を読む時、映画を観る時も、天才たちは普通に観るだろうけど、僕はそこから何か一つでも言葉を持って帰ろう、行動につなげようとしました。そんな風にすべての事象を「仕事のために生きているんだ」と強制的に錯覚させる――ということをこの世界に入ってからずっとやってきました。あとは毎日、必ずノートに好きな副詞を何十個と書いて、副詞と形容詞の組み合わせを何十パターンも作ってから寝るとか。それが役に立ったかどうかは分かりませんが、これを続けることで、この特別な世界で化け物たちと一緒に立つことへの勇気を奮い起こしていました。繰り返してやっていたら、自然と言葉の数が増え、助けてくれる人も増え、僕の頑張りを表現しやすい場所を作ってくれる人も出てきて。それでなんとか今までやってくることができています。

今でもひたすら本を読んだり、好きな言葉の並びなどを書いたりしています。人が話している時に「ここにこれ持ってくるんだ」とか、「この人の例えの組み合わせ方、面白いな」とか、感動したらすぐメモする。僕は弾として言葉を持っておこうと思っていて。何が素敵って、言葉の引き出しを開ける作業は努力でできるんですよ。天才ならナチュラルにできるんだけどね。

◉苦手な人は、持っていない引き出しを教えてくれる人

――苦手意識なども努力して克服されるのですか？

僕は、苦手な人とは一生会わないでおこうと思うタイプなんです。苦手意識を克服するか、一生会わないでおくための努力をするかの二択でしょう？ 立派な人は克服するだろうけど、僕は後者。でも、苦手なのは価値観が違うからで、苦手な人＝僕が持ってない引き出しを教えてくれる人、自分の引き出しを増やすチャンスだと、最近やっと気付いてきて。今44歳にして、意識をスイッチしようと努力しているところなんです。

この世界には「価値観の違う人が近くにいてラッキー！」と考える人たちがいるんですよ。以前ヒロミさんが、奥さんと価値観が全然違うとおっしゃっていて、「朝起きたら信じられないミスがそこかしこにある」と（笑）。それに対して、「おもしろ！ こんなところ開けっ放しにする？」「おもしろ！ こんな失敗どうやったらできる？」って毎日めちゃくちゃ楽しいんだって。「僕にはできるのに、どうしてできないんだ」ではなく、「すごいね！」ってとらえると、価値観の違う人は毎日ワクワクをくれる最高の人になるんですね。所ジョージさんも同じ事をおっしゃってたし、東野幸治さんも人の事、絶対に嫌いって言わないの。「いや～、面白い！」って。器の大きい人って、瞬時に人のいろんな側面を見る能力が備わっているんでしょうね。

でも、ありがたいことに、「嫌い」を肯定する脳みそに切り替えることは、才能がなくてもできるんですよ。「この人嫌い」と感じることがあったら、「なぜ嫌いか」と「好きになるにはどうしたらいいか」を家に帰ってノートに書く。僕、器、極小だから（笑）。そうしたら、解決策の選択肢が出てくるんですよ。あと、その人に自分が長年考えていることを話してみたりもする。すると、僕の考えは別の角度から見たらそんな風に面白かったんだって気付くことができたり、その人の別な面が見えてきたり、すべてを突っぱねるよりもはるかに自分が潤います。

◉夢を続けるかどうかは自分で決めること

――今の時代、自らの心をオープンにすることに躊躇する若者が多いと感じます。殻を破るにはどうしたら良いでしょうか。

殻って破らなきゃいけないですか？ 殻があっても、その中で自分が楽しめればいいし、その殻は素晴らしいものかもしれないじゃないですか。昔からある正解っぽい言葉に縛られている気がするんですよね。無理して「誰にでもオープンになれる人」になる必要は全くなく、それよりも自分が今やりたいことに時間を割いた方がいいと僕は思います。ただし、いろんな人に会ってみた方がいいですね。

――最後に、これから社会へ出る学生に向けて、メッセージをお願いします。

サラリーマンはしたくないとか、変わったことをしたいと思うかもしれないけど、大切なのは、目指す先を決めることより、その先で自分のやりたいことをどんな風に実現するかだと思います。僕の大好きな寮の先輩は、大学時代ずっと音楽をしていて「音楽で食っていきたい」と話していたけど、就職せざるを得なくなり、なぜか葬儀会社の採用試験ばかり受けていた。理由を聞いたら「俺、音楽葬をやりたいんだよ」と。葬儀会社で音楽を使ったお葬式ができれば、大好きな音楽で食べていけると話していて、今、本当に大手葬儀会社で音楽葬を担当して、充実した日々を過ごしている。だから、夢を続けるかどうかは自分で決めることなんです。

それに、皆さんは4年間を関大で過ごして、勉強してきたというだけでも相当すごい経歴を手にしているんですよ。もし生きづらいと感じたら、「いやいや、思ってる以上に自分ってすごいんだ」と母校を思い浮かべてほしいです。僕は、同じ大学出身で人生を楽しく過ごさせてもらっている一員として、あなたが関大を自慢できるよう、大学への恩返しのためにも必死で頑張ります。そして、いつか皆さんと「いや～、僕たち最高だな～」って言いながら集まれる日を楽しみにしています。お互い頑張りましょう。

身近な材料で、誰にでもできる料理を

「作りたくなる」ゆるくて簡単でおいしいレシピ

◉料理コラムニスト
山本 ゆり さん
―社会学部2009年卒業―

「こんなに不器用で料理本を出した人って、これまでいなかったと思うんです」。大学生の時、ブログで「簡単なのにおいしいレシピ」の紹介を始めた山本ゆりさん。レシピの内容はもちろん、関西弁のユーモア溢れる語り口、家族と過ごす日々のエピソード等が話題を呼び、一躍トップブロガーに仲間入り。2011年に念願の料理本を出版し、今や日本で最も人気のある料理レシピ考案者の一人となった。

おしゃべりで人見知りな料理コラムニスト

「読者の方がほんまにそんなにおるんか、ほんまにそんな買うてんのかなって思うけど(笑)、ありがたいです」。山本ゆりさんは、身近な材料でできるレシピと日常をつづったブログ「含み笑いのカフェごはん『syunkon』」で人気を博した料理コラムニスト。その読者登録数は39万人、Twitterのフォロワー数は115万人、Instagramは120万人を超え(2022年2月現在)、これまでに手掛けたレシピ本は11冊、シリーズ累計700万部にも及ぶ。現在は、1歳の赤ちゃんを含む3人の子育てをしながら、テレビ番組やCM出演、食品会社とのレシピ開発、雑誌のコラム執筆など幅広く活躍し、まさに全力疾走の日々を送っている。

「お茶！ 皆さん、お茶飲みません？ といっても、これペットボトルのお茶で、なんかすみません～」。ブログやレシピ本そのままの明るく軽快な関西弁。料理撮影の準備のためキッチンへ向かったかと思えば、突然くるりとUターンしてスタッフ全員に飲み物を勧めてくれる。インタビューでは、質問に丁寧に答えながら次々と愉快なエピソードを披露し、「あ～、人が来た瞬間に水を得た魚のようになって、聞かれてないことまでめっちゃしゃべるおばさんになってる～！」と、突然、頭を抱える。自身からすれば、著書『おしゃべりな人見知り』の帯に記された「黙る勇気をください。むしろしゃべってしまうのだ」の境地かもしれないが、彼女の周囲は笑いが絶えず、その“場を和ませ、人との垣根をなくす才”が、読者からも現場スタッフからも愛される由縁であることがうかがえる。

山本 ゆり――やまもと ゆり
■1986年、大阪府生まれ。2009年関西大学社会学部卒業。広告代理店に就職し営業を経験、現在は3児の母。大学時代に始めたブログ「含み笑いのカフェごはん『syunkon』」が主婦層を中心に絶大な支持を得て、2011年に初の料理本『syunkonカフェごはん』(宝島社)を出版。その後、シリーズ化され、累計700万部を超えるベストセラーとなる。2021年発行の最新刊『おしゃべりな人見知り』(扶桑社)は、料理レシピ本大賞2021エッセイ賞を受賞。

Syunkon 春魂

◀『syunkonカフェごはん7』(宝島社 2020年)
ブログやTwitterで大反響を呼んだレシピを集めた「人気おかずBEST30」を含む187レシピが掲載された『syunkonカフェごはん』シリーズ最新刊

身近な道具と材料でできる簡単なレシピを

山本さんがブログを開設したのは大学生の時。記念すべき初投稿にはこう記されている。

ここに載せる料理はほんまに簡単やから、
何それ！？ というような材料や(例：ブーケガルニ)
ないっちゅーねん！ というような材料や(例：ブーケガルニ)
高いわ！ 買えるか！ というような材料(例：渡り蟹←雰囲気。値段正味知らん)は使いません。

どーやって閉めんねんというようなかいらしい串や
かいらしいレタスがわっさ～なったお弁当や
大さじ1杯のためだけの生クリーム
卵黄5個分とかもできれば避けたい。

その言葉通り、以降、登場する料理はどれも「身近な道具と材料でできる簡単でおいしい」ものばかりだ。

そもそも山本さんが簡単なレシピを紹介しようと思ったのは、「自分が不器用で料理本の通りに作れなかったから」。自分が作れるものを紹介すれば、誰でも作ることができるはず。なんならもっときれいに作ることもできるのでは。そのため、自然と照準は初心者や料理が不得手な人に。レシピの随所にコメントを差し込み、「ここがよく分からない」「ここが不安になる」というポイントで、「シャバシャバやんぐらいが、食べる時にパサつかずちょうどいいです！」等と、絶妙なサポートを入れる。難しかったり手間がかかったりする工程は、なるべくスムーズ、かつうまくできるよう、斬新なアイデアで回避する。例えば、今日の「ブリの照り焼き」に添えられたレンコンは、生のままで飾り切りをするとボロボロになって割れやすい。そこで、山本さんは電子レンジで加熱してから切る方法を考案。こうすると、割れてもつながったまま きれいに飾り付けられる。「先に全部、自分がつまずいていますから(笑)。どの料理本にも載ってないし、基本のやり方ではないけど、うまくできないから別の方法を編み出すんです」。

また、山本さんは調味料の掲載順にも気を配る。「通常のレシピでは、使う分量の多い順に上から書きます。慣れている人は、計量スプーンを毎回洗わなくてもいいよう、頭の中でその順番を変え、粉類から入れていく。初心者の人は上から順にやるから、何度も洗うことになる。だから、私は必ず使う順に砂糖から書いています」。どうすれば手間や時間をかけず、楽にできるのか――。気付いていないだけで、工夫すれば簡単にできることは結構あるはずと、山本さんは言う。その他、なるべく食材や調味料の代案を用意するのも、意識しているポイント。「これしか使っちゃダメと言いたくないので、企業様とのタイアップ企画でもなるべく代用OKにさせていただいています」。

原点は祖母の料理と愛読書

山本さんと料理の接点は、幼少期までさかのぼる。「うちは共働きで、祖母が料理をしていたんですが、これが結構とんでもなくて。例えば小学生の時、「今日のご飯何？」って聞くと「ポテトサラダ」。わぁ、メインはどこ？(笑)「焼き鮭とご飯」だけ、とか(笑)」。そのせいか、山本さんは小学校低学年の頃から料理を始め、中学時代は自分でお弁当を作り、高校時代は家族の夕食を担当した。「ただ食べるのが好きで、自然にやってたんです」。

また、読書家だった山本さんは、小学生の頃から料理本を愛読していた。「自分ではそれが特別なことだと思っていなくて、お風呂にも持って入るし、トイレにも積んでるし、布団の下にも並べていて、読まない日はなかったです。高校時代は電車通学だったので、駅の構内にある書店で毎日、立ち読みもしていました」。けれど、作ってみたいすてきな料理はどれもたくさんの材料が必要で、その通りに作ることはできなかった。「無いと作れないのかと思って、最初の頃はお小遣いの中からパルメザンチーズとか買ってみたけど、続かない。だいたい家にある調味料は味噌、砂糖、塩、醤油ぐらいで、めんつゆの存在を知ったのも中学生になってからでしたしね」。使用する調味料の数を絞り、手元にない食材を別のもので代用する。それが、現在のレシピ考案にも生かされている。

甘辛×酸味が絶妙なブリレシピ

ブリとれんこんの照り焼き マヨレモンソース添え

材料 (2人分)
- ブリ……2切れ
- 酢、水、片栗粉、サラダ油……各適量
- れんこん……約5cm
- Ⓐ 砂糖……大さじ1
- Ⓐ しょうゆ、みりん、酒……各大さじ2
- Ⓑ 砂糖、牛乳、レモン汁……各小さじ1
- Ⓑ マヨネーズ……大さじ1
- 好みで万能ねぎの小口切り……適量

作り方
1. れんこんは皮をむき、酢入りの水に10分ほど浸し、ラップに包んでレンジで3分ほど加熱してから飾り切りに。
2. ブリに片栗粉を薄くまぶしフライパンで①とともに焼く。
3. 合わせたⒶを加えて絡める。
4. 器に盛り、合わせたⒷをまわしかけ、好みでねぎを散らす。

れんこんの飾り切りが割れずにできます！

■リーダーズ・ナウ［卒業生インタビュー］

LEADERS NOW!

◀山本さんの自宅キッチン横の壁に飾られたお子さんの描いた絵

自由な表現が肯定された大学のゼミ

料理はあくまでも日常の延長線上にあったため、料理の道ではなく大学進学を希望した山本さん。「関西大学の自由で楽しそうな校風に惹かれました。社会学部が何を勉強するのかもよく分かってなかったし、合格しそうにない成績だったんですけど、そうなるとなおさら、輝いて見えて。毎日、朝起きてから夜寝るまで、ご飯とトイレとお風呂以外の15時間、人生で一番勉強して入学しました」。

憧れの大学生活は「いろんなことを経験したモラトリアムの期間」だったという。印象深いのは、杉野昭博先生の障害学のゼミ。「学生の自由にさせてくださる先生で、文章を書く機会の多いゼミでした」。研究テーマは、「怪我等でスポーツができなくなった人の居場所について」。皆の卒業論文は先生の手によってまとめられ、最終的に書籍として出版された。ゼミは体育会の学生が多い中、体育会でなかった山本さんは、「ゼミの中での居場所」について書き、その論文は「楽しかったからめっちゃ満足です」の一文で締めくくられている。今でこそ、砕けた文章を見かけることも増えたが、当時は論文も書籍も正しい日本語を使うのが当然とされていた。「料理本もエッセイも、関西弁で自由に表現していいんだと思えるようになったのは、この時、先生が私の文章を認めてくださったからかもしれません」。

▲ゼミの仲間と卒業式にて（前列右端）

ゼミの卒業論文をまとめ出版された書籍。『スポーツ障害から生き方を学ぶ―ケガをめぐる競技者たちの語り』（生活書院 2010年）▶

これまでにない「変な料理本」の出版を目指して

山本さんがブログを始めたきっかけは、就職活動だった。「料理が好きでいろいろ調べましたが、不器用で大雑把なので料理人やパティシエは難しいと感じました。思い返した時に、たどり着いたのが“料理本が好き”ということでした」。折しも世間ではSNSがはやり始め、山本さんも友達とブログを書いていた。「それが楽しかったので、文章を書く仕事をしたい、それなら料理本を出したいと思いました」。しかし、どうしたら出版できるのかわからない。調べていくうちに、料理ブロガーと呼ばれる人たちの存在を知り、ランキングサイトで上位になったブロガーは、料理本を出版していることに気が付いた。「私もブログに料理をあげていたら、そのうち本が出せるかもしれない」。当時の料理本には遊びの要素が入ったものがなかった。お笑い好きでもあった山本さんは、料理とブログが合体したような、これまでにない「変なジャンルの料理本」の出版を目標に据え、ブログ「含み笑いのカフェごはん『syunkon』」をスタートさせた。

“ただの人”として、ゆるいスタンスで

「これめっちゃ簡単でおいしいから作ってみて」と、友達に教えるようなゆるいスタンスで始めたブログは、時代のニーズとマッチし、開設から13年目を迎えた。「気づけばめちゃめちゃ長いですね（笑）。本出したらやめようぐらいに思って始めたブログですが、本を出版できたのは、本当にブログを見てくださった方のおかげ。コメント読むのが楽しみというだけで、こんなに続けられています」。

どんなに多忙を極めても、読者とのやりとりは続けたいという山本さん。そのコメント欄は「無人の野菜売り場のような個人個人の秩序で、ずっと良い雰囲気を保っています」と言うように、今も自由なやり取りが展開されている。ツイッター等も同様で、レシピを見て作った読者の投稿写真を見て、「どうやったらそんなきれいにできるんですか？」と、逆に教えてもらったりもする。「当初は、やりとりが止まらなくなるので返信はしないと決めていたんです。でも、反抗期の息子がおかわりしてくれました！とか、子どもが作りました！って写真をあげてくれると、黙っていられなくないですか？（笑）」全てに返信したら、SNSに毒されている人みたいで気持ち悪い。恥ずかしいからセーブしていると言いつつも、「1/10も返信できていないので、がっかりしている人がいたらどうしよう」と、常に読者のことを気に掛ける。

年月を重ねたことでの変化を聞いてみると、「私自身は全然変わりません。でも、読者層の変化は感じています」と返ってきた。同世代の主婦だけでなく、娘から聞いたという年配の方や、母親に教えてもらったという小学生など、親子2代、3代で山本さんの本を活用しているという人が増えてきたのだ。「いい加減な料理本ということを前面に出してきたけど、もうちょっとちゃんとせなあかんかな？ と思うことはあります（笑）」。

また、「思いがけない意味を与えてくださるようになった」と感じるようにも。摂食障害の人から、山本さんのレシピを見て料理をしてみたくなり、「だんだん食べられるようになりました」「病気が治りました」と感謝のコメントや、看護師や療法士の方から「火や包丁を使わないレシピが、リハビリや自立支援に役立っています」と、その安全性を喜ぶコメントなどが寄せられた。まさかの出来事として、刑務所を出所した人から「初めて家族に料理をふるまい、人に喜んでもらうことのうれしさを知りました」と、メッセージが届いたこともあったという。「電子レンジだけで作るとか、自分のずぼらさ、適当さから始まったレシピだけど、長くやっているとそういうこともあるんだなと驚いています」。その分、責任も感じるが、当初からのゆるいスタンスは変えないと心に決めている。「私は料理の先生ではなく、ただの人。勘違いしたらダメ、調子に乗ったらあかんと常に思っています」。

子どもにも相談しながら“わちゃわちゃ”を楽しむ

文字通り、分刻みで仕事に追われる山本さん。気になる仕事と子育ての両立について聞いてみると、「要領悪くて、両立なんて全然できてないです。空いてる時間は全て仕事。子どもが帰宅すると何もできないから、ギリギリの時間に自転車こいで迎えに行って、そこからご飯作って、食べさせながらパソコン打って、寝かしつけが終わった瞬間からまた仕事して、昼も夜もないし、土日も仕事するから夫に子どもを遊びに連れてってもらったり。どうやって両立するのか教えてほしいです」と、笑って返された。もう少し仕事量をセーブしよう、きちんとスケジュールを立ててその通りに行動しようと思っていても、依頼されるとうれしいし、応えたい。そして、動いてしまう。ただ、このままではダメだと思った時期もあったという。「子どもが1～2歳の時は、特に罪悪感が強かったです。でも、少し大きくなったら、私がテレビに出たり誌面に載ったりすることを喜んでくれるようになって。長女も次女も、やめないでって応援してくれます」。子どもたちが成長するにつれ、相談もできるようになり、やっていて良かったと思えるようになったという。「行き当たりばったりの生活でわちゃわちゃやけど、一番下の子は生まれた時からそうやし、もうそういうもんだと思ってくれと（笑）。でもやっぱり、子どもとの時間はもっと作りたいですね」。

▲大阪府立春日丘高校バスケットボール部のチームメイトと（左から2人目）

◀大学の友人たちと沖縄旅行（前列左端）

ゼミの活動写真（2列目右から2人目）▶

毎日使える実用的な料理本を

山本さんの今後の抱負は「もっと現実的な本を作る」こと。企画ものや驚きのレシピを紹介するよりも、新たな提案を加えつつ、何度でも作ってもらえるレシピ、毎日使ってもらえる料理本を作りたい。「紙だからこその面白いものを、とも思っています。今の時代、無料でどこでもレシピを見ることができるし、動画で見た方が分かりやすい。でも、まだまだ本には可能性があると思うんです」。作りたいものがすぐに見つかる、持っているとテンションが上がる、並べているとうれしくなる、さまざまな工夫を凝らしてそんな本を作りたいと目を輝かせた。

目下、山本さんが模索しているのは、冷凍された肉をそのまま炊飯ジャーや電子レンジで調理する方法。解凍する手間が省けたらどんなに楽だろうと、何度も試行錯誤を繰り返している。料理の「めんどくさいな」「不便だな」と思う部分を解消してくれる山本さんのレシピ。次はどんなアイデアが飛び出すのだろうか。

LEADERS NOW!

■リーダーズ・ナウ［卒業生インタビュー］

失明を乗り越えて、5年後に復職

視覚障害者が働きやすい世の中に

◉視覚障害者就労相談人材バンク共同代表
岡田 太丞 さん ―商学部1989年卒業―

働き盛りの30代で突然視力を失ったら、あなたならどうするだろうか。大手都市銀行勤務の岡田さんは、タイ赴任中の2003年にこの状況に直面した。「家族をどうやって養っていくのか」。不安に押しつぶされそうになりながらも約5年後に復職し、自身の役割を見つけた。現在は、視覚障害者の就労相談支援にも携わる。その半生とは……。

岡田 太丞―おかだ たいすけ
■1965年京都市生まれ。1989年商学部卒業。卒業後、大手都市銀行に入行。2003年赴任先のタイで交通事故に巻き込まれ、失明する。約5年後に復職し、自身の経験を生かし、海外の情報を社内向けに発信する業務を立ち上げた。2017年「視覚障害者就労相談人材バンク」を設立すると共に共同代表に就任。2021年視覚障害者の就労に関する体験談を集めた書籍「あまねく届け！ 光～見えない・見えにくいあなたに贈る31のメッセージ」を同バンク有志で出版した。

◉楽しかった学生生活

40年近く前、受験で関西大学を訪れた岡田さんの目に映ったのは、広大で自然豊かなキャンパス。「ここで勉強したい！」。バンカラな校風にもあこがれた。

「学生生活は楽しかったですよ」。その4年間を懐かしそうに振り返る。サークルは千里山スポーツ愛好会に所属し、ソフトボールとスキーに熱中した。映画『私をスキーに連れてって』が大ヒットしていたそのころ、長野県白馬八方尾根に当時あった「関西大学黒菱山の家」には4年間通い続けスキーざんまいの日々を過ごした。

旅もした。アルバイトで資金をため、1年次の時にオフロードバイクを購入。2年次と3年次の時にその愛車で北海道を回った。卒業旅行はアメリカ横断も。当時は、テレビで『アメリカ横断ウルトラクイズ』が放送され、アメリカにあこがれていた。

▼オフロードバイクで訪れた北海道の宗谷岬にて

▲大学の卒業式で商学部総代として卒業証書を授与された岡田さん

学業も大切にした。ゼミナール以外の卒業所要単位は3年次で修得し、卒業式では商学部の総代を務めた。

◉グローバル銀行マンの道を進む

岡田さんが就職活動をしたのは、日本がバブル経済のピークを迎えようとしていた時期。岡田さんは食品メーカーを志望し、数社から内定を得て就職活動を終えていた。しかし、銀行勤務の関大の先輩たちから「一緒に仕事をしよう」と熱烈なアタックを受ける。固辞していたところ、内定解禁日の早朝、自宅の電話が鳴った。「君の家の前の公衆電話からだ。迎えに来た」と。「関大の先輩方の熱意に負けました。ただ、魅力的な先輩が多かったのは確かです。その先輩方と一緒に仕事をしたいと思いました」。

入行後は、大阪府内の支店に配属され、夏を過ぎたころから外回りを任された。「通常は事務や融資など一通りの銀行業務を経験してから外回りに出るのですが、営業に向いていると当時の支店長が思ったのでしょう」。

その支店長にはよく叱られた。だが、裏では「岡田はたたいたらたたいた分、頑張りよる」と評価してくれていたと、後で知った。「関大出身だからか、打たれ強くガッツがあるイメージだったのだと思います」。支店勤務3年目の途中で、社命でタイのチュラロンコン大学に留学するよう辞令が出た。

◉タイで失明、復職への強い思い

約1年間の留学を終え、神戸市内で勤務していた1995年、阪神・淡路大震災を経験。その翌年、タイ・バンコックに支店を開設することになり、再びバンコックに赴いた。

「国内支店勤務では担当できないような大企業を担当し、充実していました。第一線で働き、将来は海外の支店を任されるというようなキャリアを思い描いていました」

その矢先。2003年のある日、仕事の移動中に高速道路で事故に遭った。前方の事故で運転手が急ブレーキをかけたところ、後続車に追突されたのだ。「私は後部座席にいて、大きな衝撃を受けました」。脳が腫れて視神経が圧迫され、左目は完全に失明、右目はわずかに光を感じる程度になってしまった。

真っ暗な海に1人投げ出されたような状況。帰国したが、「最初は、徒歩での移動も食事も、何もできませんでした。何よりも家族を路頭に迷わせてはいけないと不安に押しつぶされそうになりました」。

だが、岡田さんを奮起させることが起きた。見舞いに来た上司に、今は一般的となったテレワークを提案するも却下され、「はってでも出てこい」と発破をかけられたのだ。俄然、闘志に火がついた。「分かりました。その代わり、復職したら、ちゃんと面倒を見てください」と返した。

同僚の見舞いも、どこか哀れみのニュアンスを感じた。自身も、失明前だったら「目が見えないなら通勤も仕事も難しい」と思ったに違いない。だから、同僚を批判できない。でも、悔しさは消えない。絶対に復職すると心に誓った。

タイ・バンコック留学時の岡田さん▲▶

午前中、白杖を手に西宮の自宅から大阪市内の銀行まで通勤の練習をし、午後からはパソコンの訓練。それまでは一本指でキーボードを押していたが、妻の協力でキーの配列を覚え、タッチタイピングで各種操作ができるまでになった。さらに、音声ソフトでメールやワード、エクセルを使いこなせるまでに。

そして、約5年後、復職を果たしたものの、別の問題が立ちはだかる。銀行が視覚障害者の受け入れに慣れていなかったのだ。「当初は仕事がなく、苦痛でした。何もせずに給料を得るのではなく、きちんと仕事をした対価として給料を得たいんです」。

仕事がないなら、自分にしかできない仕事を作ろう。来る日も来る日も考えて思いついたのが、海外のニュースを音声で聞き、忙しい営業担当者に配信する業務だ。「担当のメーカーがアジアで新しいラインを増設する記事が出ていた」。こうした情報は営業担当者にとって貴重だ。「私には営業担当者の気持ちが分かりますから、当初は営業担当者をターゲットにしました」。情報収集するエリアはアジアから現在では全世界に広がり、1人でしていた業務はチームで取り組むようになった。週1回、レポートをメールで配信し、月報も出す。今では約3,600人の職員にレポートが渡っている。

▲視覚障害者就労相談人材バンクのオンライン面接の様子

▲▶『あまねく届け！光　見えない・見えにくいあなたに贈る31のメッセージ』(読書日和 2021年)

◉視覚障害者就労相談人材バンクの設立と書籍の発行

2017年、ライフワークとなる活動を始めた。就労している、あるいは就労していた視覚障害者のネットワークづくりだ。この「視覚障害者就労相談人材バンク」は、相談者のニーズに応じて就労経験者を引き合わせる役割を果たす。人材バンクへの登録者は、設立当初は関西で勤務する当事者がほとんどだったが、最近では関東や九州等、全国から「自分も一緒に活動したい」と活動主旨に賛同する仲間が人材バンクに登録してくれるようになり、現在では登録者数は100人を超えた。

「目の疾患は働き盛りに発症することが多く、その時に会社を辞めてしまうと再就職は難しいんです。なので、辞めるのではなく、自身の仕事の経験値を社内で生かす方法を考えることも大切だと思います。私の経験をヒントにしてもらいたい、という思いで続けています」

2021年、31人の体験談を集めた書籍を人材バンクで出版した。自身の経験も載せている。視覚障害者だけではなく、企業や教育関係者などからも多くの反響があり、初版は完売、重版に至った。

岡田さんの存在によって、同僚が抱く「視覚障害者のイメージ」に変化が生じている。「私からのメールを読んで、障害と言っても近視程度に思っている人が多いのですが、私が白杖を使っている見えない人間だと知ると非常に驚かれます。視覚障害者も仕事ができるということを、まずは同僚に知ってもらうこと、そして銀行の全職員に知ってもらうことが私の使命。知った人たちの一部は、そのことを周囲に話すでしょう。そうやって、視覚障害者が働きやすい世の中にしていきたい。働きたいと思っている視覚障害者が、普通に働ける世の中にしたい。自分にできることをやっていけば、この目標に少しでも近づくと思っています、そして、今現役の私たちが汗をかくことで、視覚障害の学生さんたちの就労への道が少しでも広がること、それを信じてこれからも頑張っていきます」。

▲岡田さんお気に入りの大学スポット
関西大学博物館の前で

LEADERS NOW!

■リーダーズ・ナウ［在学生インタビュー］

挑戦で出合う新たな発見

人の幸せにつながる仕事に就きたい

◉社会学部 3年次生
西村 悠里 さん

授業の一環で友人と共に応募した献血キャンペーンのキャッチフレーズ。そこで作品が選ばれたのが西村悠里さんだ。実は、これまでにも数々の公募にチャレンジしてきたが、作品が世に出るのは今回が初めて。西村さんの思う“広告を作る”ということ、さらに学生生活で得たものや今後の抱負についても大いに語ってもらった。

「あなたの今日が、だれかの明日に。ハタチの献血」――1月から2月に実施された「はたちの献血」キャンペーンのポスターを飾るキャッチフレーズ。公募で集まった836点の候補から選ばれたのが西村さんの作品だ。

その連絡は、偶然にも授業中にパソコンを使って他の広告賞の話をしていた時。応募してから時間がたっていたこともあり、厚生労働省からのメールに驚いた。「最初は正直、実感がわかなくて。自分の考えたフレーズが印刷されたポスターを見た時に、ようやく本当だったんだ！って実感しました」。

応募のきっかけは教授からの「みんなで応募してみよう」という声掛け。応募するための準備にと、西村さんは友人に献血の体験談を聞いてみた。「献血は意外と時間がかからないし、何よりたくさんの人に“ありがとう”って言ってもらえるんだよ、と教えてくれました。それを聞いて、献血に行くという自分のちょっとした行動が、誰かの未来の役に立つんだ、と気付いたんです。そんな献血っていいなと思って出てきたフレーズでした」。

今回の応募は、献血についていろいろ知るいい機会になった。下調べをすることで新しく知ったことも多く、勉強になったという西村さん。「物事の背景まで新たに知ることができるという面でも、広告を作ることはたくさんの発見があるし、やりがいがあってとても面白いなと思っています」。

広告は短いフレーズが多くの人の目に留まり、印象を残す。「韻を踏んだり、分かりやすい言葉選びをすることはもちろんですが、受け入れられやすい言葉を選んだり、誰かを傷つけそうな言葉は避けるようにしています。そのため、いろいろな視点から考えるように心掛けています」。応募のきっかけになった授業では、現在もさまざまな広告賞へ意欲的に応募を続けている。

広告の制作と同時にもう一つ学生生活で夢中になったものは、よさこいを披露する、お祭りダンスサークル“漢舞（かんまえ）”での活動だ。新歓公演で圧巻の群舞に魅せられて入部した。コロナ禍前は各地の祭りへ頻繁に出掛けていたという。

昨年末に引退したものの、今でもその魅力を語りだすと止まらない。「大勢が一つになって踊る舞台は本当に圧倒されると思います。その一つ一つの舞台を作るために、みんなで協力して曲や衣裳も一から一生懸命に考えて。熱い仲間たちには感謝と尊敬の気持ちでいっぱいです」。

現在は就職活動中という西村さんだが、一つ大切にしていることがある。「人と関わることが好き。自分がしたことで人が喜んでくれたり、誰かが幸せになってくれたりしたらすごくうれしい。広告の仕事に限らず、そんなふうに人と関わっていける仕事に就けたらなって思っています」。

▲（左）舞洲で開催された『こいや祭り』。「コロナ禍で例年通りとはなりませんでしたが、開催してくださったことに感謝しています」（西村さん）

西村 悠里――にしむら ゆうり
■2000年、大阪府吹田市生まれ。関西大学第一高等学校卒業。昨年末まで関西大学学生チーム“漢舞（かんまえ）”で活躍。厚生労働省、都道府県および日本赤十字社が実施した令和4年「はたちの献血」キャンペーンのキャッチフレーズに応募作品が選ばれた。

多様性の当たり前を実現できる世界を目指して

自分らしく表現し、夢をかなえる

◉人間健康学部 2年次生
藤原 ももな さん

藤原 ももな
――ふじわら ももな
■2002年、愛媛県松山市生まれ。県立松山東高校卒業。1歳半で筋ジストロフィーと診断されて以降、車椅子に。幼少期から普通学級に通い、現在は一人暮らしをしながら大学生活を送る。高校時代に出会った演劇に魅了され、現在は映像作品出演を目指す。

筋ジストロフィーという難病を抱えながら、明るく前向きに毎日を過ごす藤原ももなさん。キャンパスの近くで一人暮らしをしながら仲間たちと楽しく大学生活を送る傍ら、テレビ出演をきっかけに高校時代に始めた演劇の魅力を再認識。映像作品への出演を目指すその心のうちには「多様性が当たり前になる世の中」を望む気持ちがあった。

▲幼少期の藤原さん

「『しんどい事はない？』『困ってる事は何？』とよく聞かれるけど、あまりないんです。しんどいと思うその時間が一番しんどい。そう思う暇があったら早く解決したいし、楽しい事がしたい」と笑顔で話す藤原さん。立ち上がってもすぐに転んでしまう1歳半の我が子を両親が病院へ連れていった時、筋ジストロフィーと診断された。これは身体の筋肉が壊れやすく、再生されにくい症状を持つ難病だ。

藤原さんは特別支援学校には通わず、高校まで地元・松山の普通科の学校に進学。地元から遠く離れた関西大学を選んだのは、社会福祉の勉強がしたかったことや、入試スタイルが自分にぴったりだったことに加えて、新たな場所で一人暮らしをしたかったのも理由の一つだと言う。「大学生になったら……と、ずっと思っていました。家族も反対どころか『じゃあ準備は何をしたらいいかな』と、前向きに応援してくれてありがたかったです」。

車椅子で暮らせる物件探しなど初めての体験も、大阪の相談支援専門員や訪問看護・訪問診療の担当者、ヘルパーの方々など、多方面とコミュニケーションをとりながら時間をかけて準備したので、不安もなかった。そんな一人暮らしももう2年になり、すっかり慣れた様子だ。

大学では学びたかった社会福祉、特に興味があった障害者福祉の授業でも、現場に携わる先生から生きた実際の経験談を聞けることが興味深いと話す。日々の勉強で社会福祉士の資格取得を目指す一方、休日には同級生と遊びに出掛けたり、最近はゼミで仲良くなった先輩たちとの交流も深まり、ますます学生生活を謳歌している。

そんな藤原さんが、勉強以外にも夢中になっているものがある。高校時代に部活動として初めて触れた演劇だ。演劇部の部活紹介を見て、「自分でもこの部活で何かできることありますか？」と自ら先輩に声を掛けて入部。校内公演や演劇大会の舞台にも出演した。「お芝居は身一つでできるし、何にでもなれる。自分のような一定の制限がある生活をしていると、お芝居の中では自由でいられる！ 自分だって何でもできる！って強く感じられたんです。実際生活の中でも、萎縮せず新しい事をどんどんやりたいと思った原点ですね」。

▲演劇に出会った高校時代

高校卒業後、演劇から少し離れていた藤原さんに転機が訪れたのは2021年の春。NHKのバラエティ番組「バリバラ」で“俳優になりたい障害のある人”の募集を偶然に見つけた。「オーディションの即興芝居では、自分の感情を引き出すことで高校時代とは違う新たな表現ができました。新しい一面を出せたと思います」。結果は見事合格。やりたい事があったら、自分から行動することが必要かつ大事だと感じた。「回を重ねるごとに夢中になっている（笑）」と演技の魅力を再発見。早速、東京の障害者専門芸能事務所が始めたオンラインレッスンの受講も始めた。

「以前から映画やドラマは好きで見ていたけど、難病の人、車椅子の人など障害を持つ人物というと日常シーンにはあまり登場しない。たまに出てきたとしても主役やキーマンを健常者の俳優が演じていることが多いんです。現実世界だと障害を持つ人も日常にいて当たり前なのに、映像作品ではまだ当たり前じゃない。私が出演することで、“多様性の当たり前”を表現できたらと思います」。作品に出演する時には自分の障害という一部分ではなく、人間性を見てもらえるぐらいの知識や技術を身に付けたいというのが最終目標だ。

将来の夢はまだまだ可能性を模索中。自分にしかできない、自分ができることを追求していく大学生活にしたいと言う。「障害があるということよりも先に、まずはやりたいことが何かを考えたい。そして自分が目標に向かおうとした時、周りのみんながその現実のためにどうすればいいか、自然と一緒に考えてもらえるような人になりたい。誰もが自分らしく生きられる社会の実現に向けての努力を続けていきたいと思います」。

産学・地域連携と連動した人材育成プロジェクトがJST「次世代研究者挑戦的研究プログラム」に採択

国立研究開発法人科学技術振興機構(JST)の公募による「次世代研究者挑戦的研究プログラム」に、本学の山本秀樹副学長(環境都市工学部教授)を事業統括者とする『豊富な産学連携・地域連携と連動させた「考動力」人材育成プロジェクト』が選定された。

同プログラムは、博士課程後期課程の学生が研究に専念できる環境を整備し、卓越した博士人材の育成や輩出を目指す事業。本プロジェクトでは、人文・社会科学分野と自然科学分野の学生に向けた産学・地域連携プログラムと、企業等のマネジメント担当者や連携協定自治体等と協力して専門的なキャリア支援プログラムを提供し、我が国の科学技術の発展やイノベーション創出に貢献できる人材育成を図る。

第3回関西学生ハーフマラソン2022女子の部で体育会陸上競技部・柳谷日菜さんが2年ぶり2度目の優勝

第3回関西学生ハーフマラソンが1月30日、大阪城公園～ヤンマースタジアム長居にて開催され、体育会陸上競技部の柳谷日菜さん(経4)が1時間11分26秒の自己ベストをマークし、優勝。第1回大会から1分18秒もタイムを縮め、2連覇を果たした。

(写真提供:関西学生陸上競技連盟)

第90回全日本フィギュアスケート選手権大会、第94回日本学生氷上競技選手権大会にて続々優勝！

▲男子団体で2年ぶりの優勝を果たした(左から)三宅さん、須本さん、木科さん

◀ペアで優勝した市橋さん(右)、柚木さん
(写真提供:関大スポーツ編集局)

12月22日から26日まで、さいたまスーパーアリーナで行われた第90回全日本フィギュアスケート選手権大会のペアで、本学体育会アイススケート部の市橋翔哉さん(安全4)、柚木心結さん(京都宇治FSC)が見事、優勝を飾った。また、男子シングルでは三宅星南さん(情2)が6位入賞を果たした。

さらに、1月4日から7日まで、北海道・帯広の森スポーツセンターで行われた第94回日本学生氷上競技選手権大会フィギュア競技の7･8級クラス男子団体では、アイススケート部の須本光希さん(政策3)、木科雄登さん(安全2)、三宅星南さんが2年ぶりの優勝を成し遂げた。

関西大学協賛の「大阪マラソン2022」がエリートランナーのみで開催

2月27日、第10回大阪マラソン・第77回びわ湖毎日マラソン統合大会(公益財団法人日本陸上競技連盟、大阪府、大阪市、公益財団法人大阪陸上競技協会主催)が行われた。今大会は、新型コロナウイルスの感染拡大により一般ランナーの参加が中止され、エリートランナー部門のみでの開催となった。

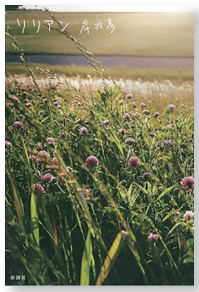
関西大学は第1回大会からオフィシャルスポンサーとして大会運営に参画。しかし今大会は、関大ランナー、ボランティア等の参加はかなわなかった。「大阪マラソンEXPO」にてパネル展示「大阪マラソンと“SDGs”」を予定していた社会学部・劉雪雁ゼミでは、SDGsをテーマにさまざまな人たちへの取材から気付いたことを、大阪マラソン組織委員会公式SNSや本学「大阪マラソン応援サイト」、読売新聞広告紙面等で、広く社会に向けて発信した。

▲東京パラ女子マラソン(視覚障害T11/T12)金メダリスト道下美里さんへのインタビューの様子

● 本学 大阪マラソン2022応援サイト

岸政彦さんの『リリアン』が、織田作之助賞を受賞

▲第38回織田作之助賞を受賞した岸政彦さん



▲小説『リリアン』
(写真提供:新潮社)

12月17日、第38回織田作之助賞の選考会が毎日新聞大阪本社で開催され、本学の卒業生である岸政彦さん(1991年社会学部卒業・1995年社会学研究科修了)の小説『リリアン』(新潮社)が選ばれた。

同賞は、小説はもとより評論活動でも活躍し、日本文学に一時期を画した大阪の作家・織田作之助の生誕70年を記念して1983年に創設されたもの。

Real KANSAI UNIVERSITY NEWS LETTER
No.68 March, 2022
発行日・2022年(令和4年)3月25日
発行・関西大学 総合企画室広報課
大阪府吹田市山手町3-3-35
〒564-8680 TEL 06-6368-1121
www.kansai-u.ac.jp

OSAKA MARATHON 2022
関西大学は大阪マラソン2022のオフィシャルスポンサーです。
関西大学

感染拡大予防対策を講じたうえで、すべての取材や制作を行っています